

言葉屋

7巻

(光)の追跡者たち

作・久米絵美里
絵・もとやまさこ

第一章 毒舌姫のしっぽ

「時にこむむ、毒舌とはなんだろうか」

ある日のお昼休み、お弁当を食べながら詠子の前でそう切り出したのは、ばなちゃんこと、橘明音ちゃんだった。中学一年生のころから詠子と同じクラスで、部活も同じタロット同好会。中学に入ってから、詠子が最も多く時間をとっているといつて過言ではない相手で、だからこそ詠子は今日、いつものようにふたりでお弁当を食べている最中にそう切り出したばなちゃんの表情が、いつもより少し奇妙なことに気がついた。

元々、ばなちゃんは感情が顔に出にくい。ぱつと短く切りそろえられた前髪や肩上の髪はつややかな黒髪で、そんなばなちゃんを日本人形やけししのようにと称する人は少なくない。実際、詠子よりもさらに小柄で、感情の起伏があまりないばなちゃんには、いつも冷静にまわりの人間をながめている人形のようなところがあった。

だからこそ、そんなばなちゃんの表情に色がつくということはめずらしく、詠子は心配になる。しかし、「どうしたの、急に?」「たずねたはいいものの、すぐにはつと気がつき、

「あ、脚本のこと?」

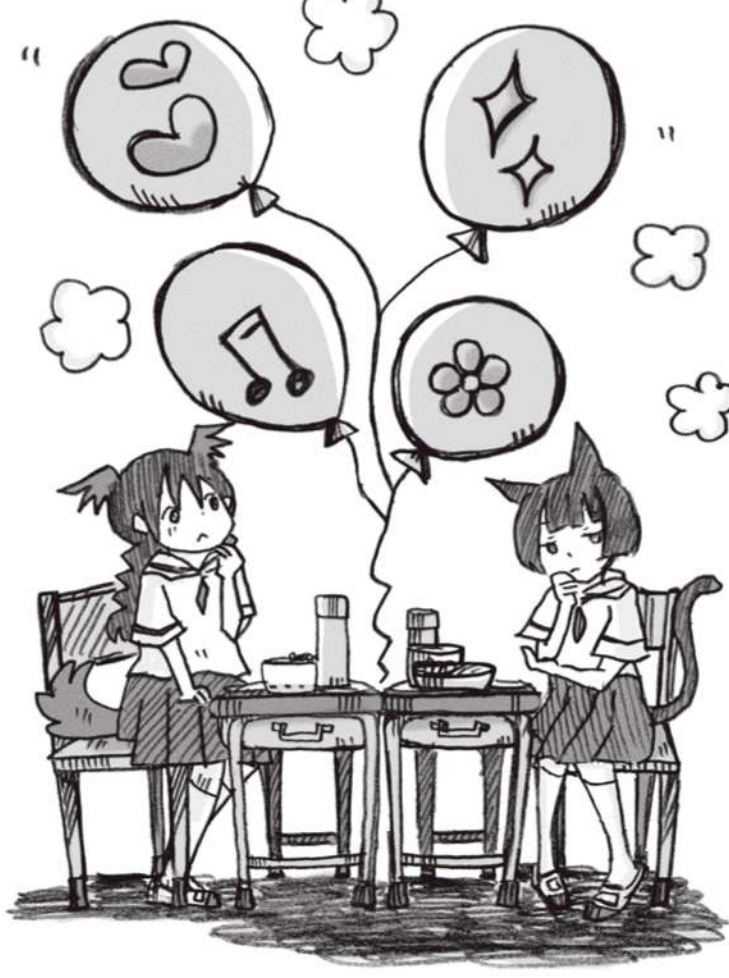
詠子はそうつとくわえた。そう、詠子と出会う前から、ばなちゃんにはずっと、脚本家になりたいという具体的な夢があった。その熱意たるや、授業中も授業のノートの下にルーブリックを忍ばせ、脚本を書いているほどで、タロット同好会に入ったのも、占いに訪れるお客さんの悩みを聞くことで、人間の感情や人間関係について深く学ぶためだという。

そんなばなちゃんなので、ばなちゃんの生活の中心にはいつも、「いい脚本を書くためにはどう生きるべきか」という軸があり、ば

なちゃんの一言一動はその軸に沿って決まっている。そのことを、詠子はよく知っていた。だから今回の唐突な問いかけも、今書いている脚本についての悩みのだろうと思いついたのだ。

しかし、詠子の問いかけにばなちゃんは、「うん、まあ」とめずらしく視線を落として口ごもる。詠子はあわてた。

「あー、それ、前、誰かも言っていたわー」とうなずいたらしい。それでばなちゃんは、自分が毒舌家だということが、多くの人の総意



「なにか、あった?」
「変に偽善的にも同情的にもならないように気をつけながら、詠子はなるべく平然とした声でたずねなおす。すると、詠子のそのせわしない気遣いに気がついたのか、ばなちゃんの方が、これ以上詠子を追いこむまいと配慮してくれたようで、決意の表情を浮かべ、事の起りは、昨日の理科の授業における

【これまでのお話】主人公は古都村詠子。小学5年生のある日、小さな雑貨屋を営むおばあちゃんの本当の仕事は、「言葉屋」だと知り、言葉屋の修行を始めます。同じクラスで、活発なだけ乙女なものが好きないちゃん(椎名満月)と親友になり、その幼なじみの須崎哲平くんや桐谷伊織くんとも、仲良くなります。伊織くんは別の中学校に進学しますが、秘密の貸本文通以来、詠子はやりとりを続けています。また中学1年のときに、同業「言葉屋」の子の喜多芳語くんが転校してきて、仲間の輪が広がります。詠子はタロット同好会、しいちゃんはミュージカル部所属。

【これまでのお話】主人公は古都村詠子。小学5年生のある日、小さな雑貨屋を営むおばあちゃんの本当の仕事は、「言葉屋」だと知り、言葉屋の修行を始めます。同じクラスで、活発なだけ乙女なものが好きないちゃん(椎名満月)と親友になり、その幼なじみの須崎哲平くんや桐谷伊織くんとも、仲良くなります。伊織くんは別の中学校に進学しますが、秘密の貸本文通以来、詠子はやりとりを続けています。また中学1年のときに、同業「言葉屋」の子の喜多芳語くんが転校してきて、仲間の輪が広がります。詠子はタロット同好会、しいちゃんはミュージカル部所属。

「うん……。確かになんだろう。わかりやすい、からなのかな。毒舌って、聞いててどきつとするような言葉ばかりで刺激的だし、ふだんの生活ではあんまり耳にしないから……。だから、テレビの世界っていう特別な場所だとコメントとして目立つし、番組をつくらしている人も、つかいやすい、とか……?」

考えながら話をはじめてしまったせいで、詠子の答えははてなマークだらけになってしまふ。当の詠子も、自分の口から出ていくその答えもどきにあまり納得していなかった。

しかし、ばなちゃんはそうでもなかったのか、「そう、か。わかりやすい、か……」と、詠子のもやもやとした声の中から、ひとつの言葉を抽出し、自分の答えの材料にしてくれる。そして、しばらく無言でお弁当のたまごやきをゆつくりと噛み、それをしっかりとのみこむと、

「ありがどう、こむむ。見えた。とても、見えたよ」

と、真剣な表情で詠子を見つめて、大きくうすいた。

しかしその表情が、すつきり、というよりも、どこか思いつめたようなものであったことに、詠子もつと早くに気がつくべきだったのかもしれない。「見えた」とくりかえしたばなちゃんが、次の日に詠子の前に持ってきた答えは、詠子がまったく想像していなかったものだった。

「ありがどうでれ」
「……でれ?」
次の日、これまたいつものようにいっしょにお弁当を食べようと机の位置を動かした際、ばなちゃんのふん机も詠子が位置を整えると、ばなちゃんはそうお礼を言った。

「本物のしっぽの方?」
「そう。犬は、人間ほどは顔に表情は出ない。しかし、どんなに無表情でも、ふんふんとしっぽをふってれば、よるこんでいることがみんなに伝わる。そういうしっぽが、人間にもあれば、ずつと思っていた。いや、私以外のみんなは持っているような気がする。クラスのグループトークを見ていたつてそう。だいたい、特に女子は、とてもしっぽにしっぽを……もとい、絵文字やスタンプをつかう。ただ「ありがどう」と書くだけじゃぶつたらぼうになつて全然よるこんでいるように見えないけれど、ハートマークやキラキラをつければ、とたんに感情がわかりやすくなる。本当によるこんでいるんだらうかと、

「え? えつと、語尾? 今の『でれ』つて、語尾だったの?」
「そう。感謝のあまり、思わずでれつとしてしまった気持ちも、そのまま言葉にくっつけて、「ありがどうでれ」。うれしくて、嬉々としていた時は、『うれしい嬉々』。悲しくて泣き出しそうな時は、『悲しくしく』。この場合はちよつと応用編で、『い』が省略される」
「えーつと、『うれしいびびん』とかじゃ、ダメ、なの?」

「オリジナリティーがほしい。し、『びびん』は浮気者でわかりづらい。現に、『悲しいびびん』も成り立つ。対して、私のしっぽは『途である』」
「確かに……」

詠子が思わず納得すると、ふたりの間にしばし静寂が流れる。

その間詠子は、ばなちゃんそのすがすがしい論破の跡地をたたばうつと見つめてしまつていたが、ばなちゃんはやがて、ふーつと長いため息をこぼすと、その地にさばつていた沈黙を横に吹き流した。

「いや、わかるよ。舞台上やテレビの中ならまだしも、現実世界でこのしっぽの普及が無理難題であることは、私にもわかっている。ただ昨日、この世に毒舌を超えるわかりやすさはありやしないのだからと考えていた中で、ふとしっぽに憧れたんだ。そう、私は昔からずつと、しっぽがほしかった」

「ありがどうでれ」
「……でれ?」
次の日、これまたいつものようにいっしょにお弁当を食べようと机の位置を動かした際、ばなちゃんのふん机も詠子が位置を整えると、ばなちゃんはそうお礼を言った。

「ありがどうでれ」
「……でれ?」
次の日、これまたいつものようにいっしょにお弁当を食べようと机の位置を動かした際、ばなちゃんのふん机も詠子が位置を整えると、ばなちゃんはそうお礼を言った。

「本物のしっぽの方?」
「そう。犬は、人間ほどは顔に表情は出ない。しかし、どんなに無表情でも、ふんふんとしっぽをふってれば、よるこんでいることがみんなに伝わる。そういうしっぽが、人間にもあれば、ずつと思っていた。いや、私以外のみんなは持っているような気がする。クラスのグループトークを見ていたつてそう。だいたい、特に女子は、とてもしっぽにしっぽを……もとい、絵文字やスタンプをつかう。ただ「ありがどう」と書くだけじゃぶつたらぼうになつて全然よるこんでいるように見えないけれど、ハートマークやキラキラをつければ、とたんに感情がわかりやすくなる。本当によるこんでいるんだらうかと、

「え? えつと、語尾? 今の『でれ』つて、語尾だったの?」
「そう。感謝のあまり、思わずでれつとしてしまった気持ちも、そのまま言葉にくっつけて、「ありがどうでれ」。うれしくて、嬉々としていた時は、『うれしい嬉々』。悲しくて泣き出しそうな時は、『悲しくしく』。この場合はちよつと応用編で、『い』が省略される」
「えーつと、『うれしいびびん』とかじゃ、ダメ、なの?」

「オリジナリティーがほしい。し、『びびん』は浮気者でわかりづらい。現に、『悲しいびびん』も成り立つ。対して、私のしっぽは『途である』」
「確かに……」

詠子が思わず納得すると、ふたりの間にしばし静寂が流れる。

その間詠子は、ばなちゃんそのすがすがしい論破の跡地をたたばうつと見つめてしまつていたが、ばなちゃんはやがて、ふーつと長いため息をこぼすと、その地にさばつていた沈黙を横に吹き流した。

「いや、わかるよ。舞台上やテレビの中ならまだしも、現実世界でこのしっぽの普及が無理難題であることは、私にもわかっている。ただ昨日、この世に毒舌を超えるわかりやすさはありやしないのだからと考えていた中で、ふとしっぽに憧れたんだ。そう、私は昔からずつと、しっぽがほしかった」

「ありがどうでれ」
「……でれ?」
次の日、これまたいつものようにいっしょにお弁当を食べようと机の位置を動かした際、ばなちゃんのふん机も詠子が位置を整えると、ばなちゃんはそうお礼を言った。

「ありがどうでれ」
「……でれ?」
次の日、これまたいつものようにいっしょにお弁当を食べようと机の位置を動かした際、ばなちゃんのふん机も詠子が位置を整えると、ばなちゃんはそうお礼を言った。

「本物のしっぽの方?」
「そう。犬は、人間ほどは顔に表情は出ない。しかし、どんなに無表情でも、ふんふんとしっぽをふってれば、よるこんでいることがみんなに伝わる。そういうしっぽが、人間にもあれば、ずつと思っていた。いや、私以外のみんなは持っているような気がする。クラスのグループトークを見ていたつてそう。だいたい、特に女子は、とてもしっぽにしっぽを……もとい、絵文字やスタンプをつかう。ただ「ありがどう」と書くだけじゃぶつたらぼうになつて全然よるこんでいるように見えないけれど、ハートマークやキラキラをつければ、とたんに感情がわかりやすくなる。本当によるこんでいるんだらうかと、

「え? えつと、語尾? 今の『でれ』つて、語尾だったの?」
「そう。感謝のあまり、思わずでれつとしてしまった気持ちも、そのまま言葉にくっつけて、「ありがどうでれ」。うれしくて、嬉々としていた時は、『うれしい嬉々』。悲しくて泣き出しそうな時は、『悲しくしく』。この場合はちよつと応用編で、『い』が省略される」
「えーつと、『うれしいびびん』とかじゃ、ダメ、なの?」

「オリジナリティーがほしい。し、『びびん』は浮気者でわかりづらい。現に、『悲しいびびん』も成り立つ。対して、私のしっぽは『途である』」
「確かに……」

詠子が思わず納得すると、ふたりの間にしばし静寂が流れる。

その間詠子は、ばなちゃんそのすがすがしい論破の跡地をたたばうつと見つめてしまつていたが、ばなちゃんはやがて、ふーつと長いため息をこぼすと、その地にさばつていた沈黙を横に吹き流した。

「いや、わかるよ。舞台上やテレビの中ならまだしも、現実世界でこのしっぽの普及が無理難題であることは、私にもわかっている。ただ昨日、この世に毒舌を超えるわかりやすさはありやしないのだからと考えていた中で、ふとしっぽに憧れたんだ。そう、私は昔からずつと、しっぽがほしかった」

「ありがどうでれ」
「……でれ?」
次の日、これまたいつものようにいっしょにお弁当を食べようと机の位置を動かした際、ばなちゃんのふん机も詠子が位置を整えると、ばなちゃんはそうお礼を言った。

「ありがどうでれ」
「……でれ?」
次の日、これまたいつものようにいっしょにお弁当を食べようと机の位置を動かした際、ばなちゃんのふん机も詠子が位置を整えると、ばなちゃんはそうお礼を言った。

「毒舌」ってなんだろう? 友の言動にともなう詠子

「言葉屋」とは、「言葉を口にする勇氣」と「言葉を口にしない勇氣」を提供するお店のこと。小5で「言葉屋」見習いとなった詠子が「言葉」との向き合い方に悩み、考え、成長していく物語です



朝日学生新聞社は、「言葉屋」(光)の追跡者たち「久米絵美里 作 もとやまさこ 絵 税込 1180円」を9月20日に発売します。